『つながれ心、つながれ力』　～３．１１東日本大震災に立ち向かった音楽家たち～　工藤一郎　著　　芸術現代社刊（￥１，９９５）から著者工藤一郎氏の承諾を得て、ＪＯＦＣに関連する部分を写真を含めて抜粋して転載しています。

日本プロオーケストラファンクラブ協議会事務局長　武藤義典

～～

＜3＞　～被災地へ、そして全国へ～　の一部

（４３ｐ～４４ｐ、４７ｐ～５３ｐから抜粋）

４月１８日のオーケストラアンサンブル金沢（ＯＥＫ）「大震災からの復興支援コンサート」（石川県立音楽堂）と、４月２１日の「東北応援チャリティ・コンサート　～仙台フィルとともに～」（サントリーホール）は、全仙台フィル・メンバーを熱い感動で包み込んだ。

「チャーターバス３台に分乗して、金沢目指して出発したのが４月１６日の朝でした。みんな震災で打ちのめされていたし、８時間の長旅だったし、高速道路は途中までデコボコだったしで、心は沈みがちだったのですが、向こうに着くとすぐにＯＥＫの皆さんの大歓迎を受け、その日から熱のこもった練習が始まったので、いっぺんに前向きな気持になりました。」〔仙台フィル・ヴァイオリン奏者／松山古流〕

「練習初日にチェロが≪新世界≫の出だしを弾き始めた瞬間、もうダメでしたね。涙が出て来て止まらないんですよ。本番当日は会場全体に今まで経験したことのないような熱気が張りつめていました。演奏が終わると客席は総立ち。そして“パン、パン”と破裂するような力のこもった拍手の中に、あちこちから“ガンバレー”という大きな声も聞こえて、またまた涙、涙でした。」〔仙台フィル・トロンボーン奏者（ユニオン仙台フィル代表）／菊池公佑〕

勿論、泣いたのは菊池だけではない。そして、サントリーホールでもこの感動が再現された。

「私にとっては、引退された筈の師匠、宮本文昭先生が、１番オーボエのアシスタントとして演奏に参加して下さったのが、一生忘れられない感激でした。あんなに温かくて大きな励ましはありません。」〔仙台フィル・オーボエ奏者／西沢澄博〕

この流れはさらに続いて行く。【「音楽現代」２０１１年７月号】

『証言』

●オーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）ゼネラルマネージャー／岩崎巖

３月１１日は石川県立音楽堂も揺れました。飯森範親さんの指揮で、３月１３日に行われる「オーケストラ・アンサンブル金沢第 34 回名古屋定期演奏会」の練習をしている時でした。この日はコンサートホールが塞がっていたので邦楽ホールでやっていたんですが、

震度３の揺れが来て演奏が止まりました。暫くして東北方面が大変な事になっているのが判ってきて、真っ先に仙台フィルの事が心配になりました。

同時に、2007 年の能登半島地震を思い出しました。この時は石川県を中心に最大で震度６強の地震に襲われ、死者も出ました。これには全国の皆様から温かい救援の手が差し伸べられ、お陰さまで最近やっと落ち着いてきたところです。この事に思い当たり、その恩義に報いるためにも、演奏団体としてできる事をすぐにやらなければ、という考えが湧いて来たのです。ＯＥＫと仙台フィルが合同で演奏する「大震災からの復興支援コンサート」の案は、そこから生まれました。

ただ、こういうものは半年、１年と時間が過ぎるとその意義が薄れて行きますし、もたもたしていると、いわゆる“自粛ムード”が広がりかねません。実際、３月１３日のＯＥＫ名古屋定期は行われましたが、その後に首都圏で予定されていたＯＥＫの３公演のうち、２つが中止になりました。こちら側の事情ではなく、ホール側が批判を恐れたためです。急がなければの思いは、ますます強くなりました。

しかし、「そんな事がやれるのか？」、「仙台フィルが金沢まで来られるのか？」、「この時期にやること自体への反対はないのか？」に始まって、乗り越えなければならない壁は幾つもありました。それを突破するために、まず事務局内をまとめ、「仲間同士助け合わなければ」という狼煙（のろし）を上げました。それを掲げて楽団員を説得し、次に音楽監督の了解を得るというように、着々と手を打って行きました。

その一方で、私はこれまでの経験から、この種の企画は下からの積み上げだけではなかなか実現に結びつかない、という事も知っていました。そこで、年度替りの最も多忙な時期ではありましたが、谷本知事にこの話を持って行ったのです。普通はそんな時期に知事にお会いするのは不可能に近いのですが、知事はＯＥＫの理事長でもありますので、「ちょっと理事長に話が…」とガードをすり抜け、知事と面談する事に成功しました。知事は一も二もなく賛同して下さいました。あとは発起人に金沢市長や地元経済界のトップなど、錚々たる方々に名前を連ねて頂き、実現に向かって大きく動き出したのです。

実は、私をここまで動かしたもう一つの大きな要因に、３月２１日のＯＥＫ第２９７回定期にまつわる出来事があります。この日のラロ《スペイン交響曲》のソリストは、ウィーン留学から宮城県多賀城市の自宅に一時帰国していた郷古廉（ごうこ・すなお）さんでした。多賀城市が津波被災地となった中、彼が無事だった事は知らされていましたが、こちらの本番が地震のわずか１０日後とあっては、その前に金沢まで来るのは無理だろうと、皆が諦めかけていたのです。

ところが彼は来てくれました。地震の１週間後、山形県酒田市までタクシーで行って庄内空港から羽田に飛び、金沢行きの飛行機に乗り継いで、計１２時間かけてやって来たのです。さすがに震災のショックが大きく、トラウマになっている様子でしたが、彼はそれを見事に演奏に昇華させ、渾身の表現で感動的な音楽を繰り広げてくれました。最後の方

は泣きながら弾いていましたね。

この時私は、この未曾有の大震災のさなか、彼が被災地宮城県から万難を排してやって来て、金沢の聴衆にこんなにも大きな感動をもたらしてくれたという事に深い感銘を受けると共に、音楽の持つ力の偉大さを実感したのです。やはり我々はこの音楽の力で、被災地とそのオーケストラ＝仙台フィルを助けなければならない。「大震災からの復興支援コンサート」は何としてでも成功させなければならないと、固く心に誓ったのです。

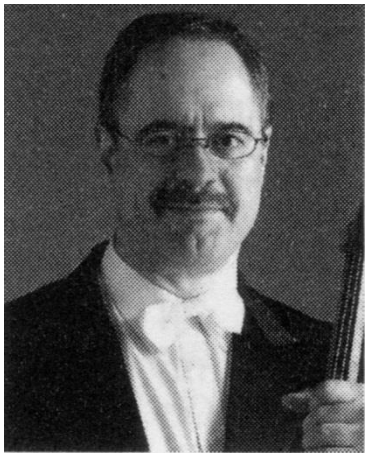
さて、知事のゴーサインを頂いたのは４月頭でした。もう時間がありません。チラシもチケットも作らず、マスコミの力を借りて「５０００円持って聴きに来て！」と呼びかける事にしました。これが瞬く間に浸透して、当日は１５６０席のコンサートホールが満席になりました。

冒頭に、４月２２日のＯＥＫ第２９９回定期に出演するために金沢にいらしていた安永徹さんのリードで、≪Ｇ線上のアリア≫を両オケ弦楽メンバーの合同で献奏しました。これに続く感動的なコンサートの模様は、お聞き及びの通りです。

このコンサートの入場料の総額から経費を差し引いた分の全額を仙台フィルに預託しましたが、経費と言っても、会場使用料は石川県音楽文化振興事業団が無料にしましたので仙台フィルの移動費だけです。ホテル宿泊料もかなりお安くして頂きました。

このようにしてこの企画の趣旨はほぼ完全に達成され、大成功に終わったわけですが、このような事ができるのも、県・音楽堂・オーケストラが一体になっているからだと思います。そして、具体的に行動を起こし、実際に事を成し遂げてこそ、真の意味での“絆”が生まれるのではないかと思っているところです。

●オーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）チェロ首席／ルドヴィート・カンタ



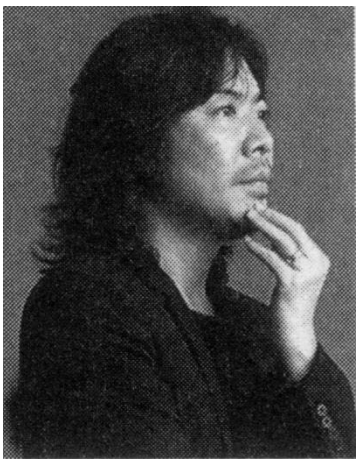
前半は山下一史さんの指揮で仙台フィルだけで演奏し、後半は合同オーケストラで、ドヴォルザークの≪新世界交響曲≫を、私たちの音楽監督・井上道義さんの指揮で演奏しました。仙台フィルの皆さんがフル編成で演奏するのは、震災後初めてと聞きました。私たちも大切な仲間である仙台フィルを応援したいし、私たちにとっても大編成で演奏できるのは嬉しいので、一生懸命に演奏しました。お客様も熱烈な拍手をしてくれました。

アンコールは井上さんの指揮で≪利家とまつ≫、山下さんの指揮で≪独眼竜政宗≫を演奏しました。お客様は最高に盛り上がり、金沢では珍しくスタンディングオヴェイションになりました。金沢の人が、あんなにみんな立ち上がって、拍手をしたり叫んだりしいるのを、私は見たことがありません。

●（株）音楽事務所1002代表取締役社長／徳永英樹

４月２１日にサントリーホールで行ったチャリティ・コンサートを企画しました。

地震の翌日、仙台フィルの我妻さんから来たメール（〈１〉の「証言」参照）で仙台フィ



ルの無事を知り、ひとまずホッとしました。しかし、被災地のただ事ではない状況が次々に分かって来ましたので、私の父であるヴァイオリニストの徳永二男と、徳永二男が所属するアーティスト・マネジメント会社＝（株）ＡＭＡＴＩの入山功一社長、そして私の三者で「今、我々クラシック音楽に携わる者ができる事は何か」というテーマで話し合いました。そこで企画されたのがこのチャリティ・コンサートです。

趣旨は「被災した方々を支援すると共に、音楽の仲間である仙台フィルを応援する」というものです。その想いを込めて、タイトルを「東北応援チャリティ・コンサート　～仙台フィルとともに～」としました。これには我が国クラシック音楽界の錚々たる方々のご賛同を得、発起人に名を連ねて頂きました。

「仙台フィルの楽団員、事務局、スタッフ、総勢 70 名を東京にお迎えし、日本を代表する指揮者やソリスト、そして各オーケストラで活躍する音楽家が同志として一緒に演奏する」というようにコンサートの基本方針を固め、その線に沿って多くのアーティストにお声掛けしたところ、皆さんが出演を快諾して下さいました。その主な方々は次の通りです。

・指揮／広上淳一、山下一史
・ピアノ／小山実稚恵
・ヴァイオリン／礒絵里子、漆原朝子、加藤知子、高嶋ちさ子、徳永二男、三浦文彰
・チェロ／堤剛、古川展生、向山佳絵子
・ハープ／吉野直子
・フルート／高木綾子
・オーボエ／宮本文昭
・パイプオルガン／ 山口綾規

約１カ月という短い公演制作期間でしたので、とにかく何事も時間との戦いでした。告知らしい告知は新聞広告１回のみ。しかし、プレスリリースをお送りした多くのマスコミがすぐに記事にして下さった（<１>参照）おかげで、チケットは発売当日に完売しました。

コンサート当日は、指揮者、オーケストラ、そして共演者が心を一つにして繰り広げる大熱演に多くのお客様が涙を流し、終演後も拍手が鳴り止みませんでした。この公演の模様はＮＨＫ―ＦＭでオンエアされましたので、被災地の方々にも聴いて頂けたのではないでしょうか。

このコンサートの全収益から仙台フィルの移動経費と公演開催に要した経費を差し引いた金額の半分を、仙台フィルの皆さんが被災地を巡って音楽を届ける「復興コンサート」の活動資金として、残りの半分を日本赤十字社を通じて被災地に寄付させて頂きました。

‹8› ～それぞれの想いに突き動かされて～ の一部（９６ｐ～９７Ｐから抜粋）

２０１１年９月１７日、「日本プロオーケストラファンクラブ協議会（ＪＯＦＣ）」の第５回総会が、「オーケストラ・アンサンブル金沢（ＯＥＫ）第３０７回定期演奏会」に日程を合わせて開催された（ＡＮＡクラウンプラザホテル金沢）。

この協議会は２００６年、札響くらぶの提唱に仙台フィルハーモニークラブ（ＳＰＣ）、山響ファンクラブ、群響ファンズ、広響フレンズが応じて５団体で設立され、翌２００７年の第１回総会をＳＰＣが担当して仙台からスタートした。現在の加盟団体は、この５つに名フィルファンクラブと、今回幹事を務めた石川県立音楽堂楽友会を加えた７団体。会長は札響くらぶ会長の上田文雄（札幌市長）。

議事は恒例に従って各団体の活動状況報告から始まったが、今回は震災発生直後から、仙台フィルへの支援方法についてＪＯＦＣ役員間で協議されていたため、それに関する取り組みも報告された。多くは募金活動であるが、これについては札響くらぶから、既に支援金を仙台フィルに贈った事が報告された。また、名フィルファンクラブからは、支援金の目録がＳＰＣに託され、後日、仙台フィル・大澤専務理事に伝達された。さらに群響ファンズからは、「ＳＰＣシート」（‹５›の「証言」参照）をＪＯＦＣとして支援する事で仙台フィル支援に繋げる案が示され、継続審議となった。

ＳＰＣの活動状況報告書の中には、それらに応えるような部分がある。

『東日本大震災によって、団の存続にもかかわるような深刻な状況に陥った仙台フィルであるが、これに屈することなく「音楽の力による復興センター」事業を立ち上げて自ら存在感を示し、このオーケストラが今後もこの地域にとって不可欠な存在であることを訴え続けた。これには地元のみならず全国、さらには海外からも温かい支援が寄せられた。

これらの熱意が実って７月に青年文化センターが再開館し、とりあえず定期演奏会はじめ仙台フィルの自主公演だけは再開された。しかし、他の主要ホールの復活のめどが立たない現状では依頼公演などの企画がなく、当分の間“片肺飛行”とならざるを得ない。そして何よりも、津波に直撃された被災地が復興するまでには長い年月が残されている。このような状況下…』

この総会が終わって間もなく「仙台市泉文化創造センター・イズミティ２１復活間近」の噂が流れ、次いで、２０１２年７月に同所で、仙台フィルと山響の合同オケによるマーラー《交響曲第２番ハ短調「復活」》の演奏会が行われる事が山響から発表されて、それが裏付けられた。

【「音楽現代」２０１２年１月号】

つながれ心、つながれ力

～ 3.11 東日本大震災に立ち向かった音楽家たち ～

工藤　一郎　著

芸術現代社